染織の模様表現における「参加」の可能性について
―　コミュニケーションをベースとした「内容的参加」の提案　―

曾斯琴　s1321915
東京藝術大学大学院　美術研究科
工芸研究領域（染織）

（論文要旨）

筆者は染織を現代生活と結びつけるという目的のもと、作品と人々の間に直接的な関連性を持たせるため、人々を巻き込む参加的アプローチを制作に取り入れようと考え始めた。しかし、染織の領域において友禅染のような高度な技術力を要し、複雑な制作過程が伴う技法による制作の場合、技術を持たない人々の「参加」を実現することは極めて難しい。本研究では、模様表現と染織の技法を根底に据え、多くの人々が作品に参加する、あるいは作品が人々の生活に介入する可能性を模索し、複雑な染織技法による制作に適用可能な参加の方法論として「内容的参加」を提案した。この理論を基盤として、博士学位審査作品《もう一つの幸せ模様（Alternative Patterns of Happiness)》を制作した。

「内容的参加」とは、制作者のプランニングのもと、参加者がコミュニケーションをベースとしたアプローチを通じて情報素材を提供することで、作品の意味内容の部分に介入し、作品への参加を実現するということを意味する。

本論は、３章から構成される。まず第１章では、染織における模様表現と技法とのそれぞれの特徴を考察した。それを踏まえて第２章では実践と理論を並行して研究を行い、「内容的参加」を提案した。第３章では論点を検証するために制作の実践を行い、その実践を巡る分析、考察、課題をまとめた。各章の内容を次のように要約する。

第１章では、染織作品と模様表現との関係性、及び物質面の技法と素材がもたらす特別な表現力に焦点を当て考察した。筆者の染めの自作に合わせて、精神面を表す模様と、物質面を表す技法という二つの側面から染織の表現上の特徴を整理した。そこで、染織の模様について「地」と「柄」から成るレイヤー構造による抽象性と、「線」と「色」の表現による象徴性を論じた。また、自然と人工との間の緊張関係を特徴とする技術と、親和性や親近感をもたらす素材の特徴を考察し、「美的体験」をもたらす染織作品特有の表現力を見出した。

第２章では、染織の模様表現における第三者の「参加」の可能性を追求するため、染織作品制作のプロセスにおける三つの段階（素材収集・造形表現・展示）に、それぞれ参加する際の要素を加えた三つの実践研究を行った。この実践を分析・比較することにより、共通する「素材提供」という参加の方法を見出した。その上、参加者とのコミュニケーションをとることで、情報という特別な素材を提供する「内容的参加」という参加的方法を提案した。さらに「参加者」・「作者」・「鑑賞者」という三つの視点から他の参加型アート作品と比較することによって、「内容的参加」の特徴を明らかにした。その後、「内容的参加」の問題点に注目し、染織における「内容的参加」の実践に立ち戻って、「参加方法」・「表現」・「作品展

示」という三つのポイントから解決策と注意点を議論し、博士審査展提出作品に繋がる方法論的基盤を作り出した。

第３章では、第１章と第２章の論を踏まえて、博士審査展提出作品である《もう一つの幸せ模様（Alternative Patterns of Happiness)》を考察した。作品では、インタビューを通して、多くの参加者が語った「自分の幸せ」をそれぞれ模様化し、染織技術によって表現することを試みた。まず、制作のコンセプト、進行プロセスと作品情報を客観的に紹介し、「幸せ」というテーマに関する心理学および哲学的研究を参照し、筆者自身の経験に基づいて、幸せの多様性を示す制作意図を説明した。次に、第２章で提案した「内容的参加」の方法論を実践する過程で、ポイントごとに工夫した点を詳述した。続いて、制作における成功点と反省点をまとめた。染織の「用」の要素をもう一つの参加方法として捉えることにより、「参加」の範疇を広げ、工芸と染織に伴う実用的な性格を本研究に活かせるよう、理論を補完した。

提出作品の制作実践は、筆者の染織技術の表現がもたらす特別な「美的体験」と、人々の「内容的参加」が作品に与える示唆に富む内容とが相まって、染織の独自の性格が生まれ、柔軟でありながら力強い芸術表現が実現されたと考える。したがって、染織における模様表現において「内容的参加」という方法論が、その有効性と啓発性を持つことが証明された。本論の結論として、コミュニケーションをベースとしたアプローチを通じて、参加者が作品の内容に介入することで、多くの人々との繋がりを持つ作品を創出することが可能である。技術の複雑さに囚われず、「内容的参加」を加えることにより、染織の創造に真の時代性と多様性が与えられ、同時に染織の魅力がより多くの人々に伝えられ、幅広い人々がその魅力を感じ取ることによる文化的普及を期待できると考える。